

## 蘇軾の「梅」に関する詩

元裕六年一月（一〇九一）、蘇東坡五十六歳、五十六歳。杭州に在つての作に、次の二十首がある。何れも陽公濟の詩に次韻したものである。この中から

「次韻楊公濟奉議梅花十首」については其一と其六

「再和楊公濟梅花十絶」については其五と其八の四首を紹介する。

楊公濟、名は蟠、公濟は字、蘇軾より先輩、この時は杭州の通判（副知事）。

## 次韻楊公濟奉議梅花十首（一〇九一年一月）

梅梢春色弄微和，作意南枝翦刻多。月黑林間逢縞袂，霸陵醉尉誤誰何。

相逢月下是瑤臺，藉草清樽連夜開。明日酒醒應滿地，空令飢鶴啄莓苔。

綠發尋春湖畔回，萬松嶺上一枝開。而今縱老霜根在，得見劉郎又獨來。

月地雲階漫一樽，玉奴終不負東昏。臨春結綺荒荆棘，誰信幽香是返魂。

日出冰澌散水花，野梅官柳漸敲斜。西郊欲就詩人飲，黃四娘東子美家。

君知早落坐先開，莫著新詩句句催。嶺北霜枝最多思，忍寒畱待使君來。

冰盤未薦含酸子，雪嶺先看耐凍枝。應笑春風木芍藥，丰肌弱骨要人醫。

寒雀喧喧凍不飛，繞林空啅未開枝。多情好與風流伴，不到雙雙燕語時。

絞綃翦碎玉簪輕，檀暈妝成雪月明。肯伴老人春一醉，懸知欲落更多情。

縞裙練帨玉川家，肝膽清新冷不邪。穠李爭春猶辦此，更教踏雪看梅花。

## 再和楊公濟梅花十絶（一〇九一年）

一枝風物便清和，看盡千林未覺多。結習已空從著袂，不須天女問雲何。

天教桃李作輿臺，故遣寒梅第一開。憑仗幽人收艾蒨，國香和雨入青苔。

白髮思家萬里回，小軒臨水為花開。故應賸作詩千首，知是多情得得來。

人去殘英滿酒樽，不堪細雨濕黃昏。夜寒那得穿花蝶，知是風流楚客魂。

春入西湖到處花，裙腰芳草抱山斜。盈盈解佩臨烟浦，脈脈當壚傍酒家。

莫向霜晨怨未開，白頭朝夕自相催。斬新一朵含風露，恰似西廂待月來。

洗盡鉛華見雪肌，要將眞色斗生枝。檀心已作龍涎吐，玉頰何勞獺髓醫。

湖面初驚片片飛，樽前吹折最繁枝。何人會得春風意，怕見梅黃雨細時。

長恨漫天柳絮輕，只將飛舞占清明。寒梅似與春相避，未解無私造物情。

北客南來豈是家，醉看參月半橫斜。他年欲識吳姬面，秉燭三更對此花。

次韻楊公濟奉議梅花十首 楊公濟奉議の梅花に次韻す

其一

梅梢春色弄微和

梅梢ばいしやうの春色はるいろ 微和びわを弄す

作意南枝剪刻多

作意さくい 南枝なんし 剪刻せんこく多し

月黒林間逢縞袂

月黒つきくろくして林間りんかん 縞袂こうべいに逢う

霸陵醉尉誤誰何

霸陵はりようの醉尉すいゐ 誤あやまつて誰何すいか

【語釈】○奉議…奉議郎（位階）の略。○弄微和…弄は手で玉をまさぐる動作。もてあそぶ、たわむれる。陶淵明の擬古詩に「春風微和を扇ぐ」。○作意…心を專一に用いる。○南枝…南向きの早咲きの梅の枝をいう。○剪刻…韓愈の詩に「誰か平地万堆の雪を將て、剪刻して此の連天の花を作りし」。○縞袂…白ぎぬの衣。しかし柳宗元の竜城録にみえる趙師雄が羅浮山に遊んで白い服の美女と杯を重ねたという物語によつて、「梅花の神女」をいう。○霸陵醉尉…漢の將軍李広は一騎を従えて田家に飲んで帰ると、霸陵の尉が酔つていて將軍と聞きながら亭下に止めた。（漢書、李広伝）○誰何…誰かとその姓名をとがめ問う。

【通釈】梅のこずえの花は春の装い。ほのかな暖かさをもてあそび、ことに南側の枝には、心をこめて彫られた美しい花が多い。月の無い森の中で白い衣の梅の花の精に出会えば、かの霸陵の酔つた尉が人間と間違えて誰何するだろう。

其六

君知早落坐先開

君 早く落つるは 先ず開けるに坐るよを知れば

莫著新詩句句催

新詩しんしを著つけて 句々に催すこと莫れ

嶺北霜枝最多思

嶺北りやうぺいの霜枝 最も思ひ多し

忍寒留待使君來

寒を忍んで 留まつて使君の來るを待てり

【語釈】○嶺北…広東省と江西省及び湖南省との境をなす五嶺内の大庾嶺をいう、梅の名所。○使君來…楊蟠をさす、○この詩の背景には「説苑」に「越の国の使者諸翁が梅の一枝を梁の国王へ送った」話・「太平御覽」に、劉宋の陸凱が、江南から長安にいる友人范曄に梅の一枝を送って「江南ある所無し、聊か一枝の春を贈る」との詩を添えてやった有名な故事を利用したとみられる。

【通釈】花が早く散り果てるのは、一番先に咲くからだと言方もご存じなら、詩の新作の一句ごとに、花を咲かせるとの御催促はおよしなさい。峠の北の霜に打たれたあ

の枝は、どれよりも思いやり深く、寒さをこらえて何時までも知事様のお出ましを心待ちにしているのですからね。

再和楊公濟梅花十絶

再び和楊公濟の梅花十絶に和す

其五

春入西湖到處花

春は西湖に入つて 到る処 花

裙腰芳草抱山斜

裙腰芳草 山を抱いて斜めなり

盈盈解佩臨烟浦

盈盈 佩を解いて 烟浦に臨み

脈脈當壚傍酒家

脈々 壚に當つて 酒家に傍う

【語釈】○裙腰：夫人の腰から下につける着物。西湖の孤山寺の路、草の緑が萌え出た時遠くから見ると裙腰のようにみえたという。○盈盈：女の容貌のしなやかな美しさ。○解佩：鄭交甫は漢江のほとりで二人の娘に逢い、その佩（腰のおびもの）をもらうが、すこし行くと佩も娘も見えなくなった（列仙伝）。○脈脈：情をこめて視つめるさま。○當壚：壚は酒の燗をするいろり。司馬相如は卓文君と酒店を開き、文君が、「壚に當つた」。

【通釈】春は西湖到るところで花を咲かせ、草のもすが山を取り巻く。しなしなと帯を解いて入江にのぞみ、スーッとそのまま酒場へ入り込む。

其八

湖面初驚片片飛

湖面初めて驚く 片々の飛ぶに

尊前吹折最繁枝

尊前に吹折す 最も繁き枝を

何人會得春風意

何人か 春風の意を会し得たる

怕見梅黃雨細時

梅の黄に 雨は細かなる時を見るを怕るればなりとは

【語釈】○尊前：酒樽のまえ。

【通釈】ふと気が付いた人をびっくりさせるのは、湖の水面をひとひら、ひとひらと舞っていく花です。そして、酒の銚子の前で、どれよりも花をたくさんつけた枝を吹き折ります。その春風の本当の心持をさとつてくれる人は誰でしょう。梅の実が黄ばむ梅雨の雨がしとしとと降る時のあのやるせなさを見るのは嫌だという心。

蘇東坡一〇〇選 石川忠久、中国詩人選集二集（小川環樹）蘇東坡 近藤光男：より抄出